

比嘉実先生を偲ぶ

シマムラ, コウイチ / 島村, 幸一

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

42

(開始ページ / Start Page)

33

(終了ページ / End Page)

36

(発行年 / Year)

2015-03

比嘉実先生を偲ぶ

島村 幸一（沖縄文化研究所兼任所員）

昨年八月一七日、本研究所の所長（一九九四年四月～一九九六年一〇月）を務められた比嘉実先生が逝かれた。享年七〇歳。逝かれるには、早い旅立ちである。

先生は、研究所の創設（一九七二年七月）の翌年、一九七三年四月から専任の研究助手に就任し、中村哲初代所長（法政大学総長）をはじめとする歴代の所長、外間守善、山本弘文、安岡昭男、武者英二を支えて、一九九六年一〇月、研究所を去られるまで研究所の運営に長い間携わってこられた。『法政大学沖縄文化研究所所報』（第一号、一九七三年六月）、研究所紀要『沖縄文化研究』（創刊号、一九七四年六月）、『琉球の方言』（創刊は、一九七五年九月）、『沖縄研究資料』（創刊は一九八二年三月）等の刊行の実務は、専任所員であった比嘉実先生が担ってきた。これに加えて、先生が中心になって科研費等の外部からの研究助成金を採ってまとめた研究所の研究成果は、『沖縄渡名喜島における言語・文化の総合的研究』（法政大学沖縄文化研究所、一九九一年七月）、『小湾字誌―沖縄戦・米占領下で失われた集落の復元』『浦添・小湾方言辞典』（浦添市小湾字誌編集委員会、一九九五年二月）、『中国福建省・琉球列島交渉史の研究』（第一書房、一九九五年二月）、『沖縄八重山の研究』（相模書房、二〇〇〇年二月）等がある。二冊の小湾の調査報告書は、第16回沖縄タイムス出版文化賞を受賞している。また、これらの研究成果には、武者英二、永瀬克己両先生等の建築学からの村落調査が含まれ、新たな村落研究の広がりが見られている。さらに『小湾

字誌―沖繩戦・米占領下で失われた集落の復元』の報告者のひとりであった加藤久子氏は、調査を継続して『小湾生活誌 小湾字誌（戦中・戦後編） 小湾新集落の建設とあゆみ』（小湾字誌編集委員会、二〇〇八年三月）をまとめている。比嘉先生が中心となって組織された研究の中から、勝れた研究成果が生み出された。

この外に、先生は大修館の『月刊 言語』第12巻4号（一九八三年四月）「総合特集 沖繩学入門」（『言語』としては異例の重厚な書）の企画を手がけ、『琉球の言語と文化 仲宗根政善先生古稀記念』（論集刊行委員会、一九八二年六月）、『琉球の歴史と文化 山本弘文博士還暦記念論集』（本邦書籍、一九八五年四月）、『球陽論叢』（ひるぎ社、一九八六年一二月）の論集刊行委員会の中心メンバーのひとりとして尽力された。さらに、浦添市教育委員会が刊行した『琉球王国評定書文書』全18巻・補遺別巻・総索引（一九八八年三月―二〇〇三年三月）についても、先生は刊行推進を図った中心者であった。すなわち、先生の業績の大きなひとつは、沖繩文化研究所の専任所員として研究所運営の実務を果たしながら、外部からの研究助成金を採って研究チームを組織しその成果を示したこと、また、その延長上に在京の沖繩研究者と沖繩在住の研究者とを結んだ研究論集を精力的に編纂刊行したことがあげられる。これらは、いうまでもなく、研究者をとり結び組織して沖繩研究を推進するという自覚に基づいた仕事であった。それは、まさに沖繩の「日本復帰」を契機にして、中野好夫氏の「沖繩資料センター」の資料を引き継ぎ、「沖繩問題」を人文、社会科学の観点から掘り下げて捉え直す「研究センター」である法政大学沖繩文化研究所が設立された精神を実践するものであった。

もうひとつの比嘉先生の仕事は、勿論琉球文学研究者としての仕事である。先生は、『古琉球の世界』（三一書房、一九八二年四月）、『古琉球の思想』（沖繩タイムス社、一九九一年五月）、中本正智先生との共著で『沖繩風物誌』（大修館、一九八四年六月）を著している。盟友、中本正智先生とは、『月刊 言語』に一〇〇回にわたって「おもろ鑑賞―琉球古謡の世界」（英訳、クリス・ドレイク、第13巻10号―第22巻1号、一九八四年一〇月―一九九三年一

月）を連載している。一〇〇回にもわたる「おもろ鑑賞」は、仲原善忠の『おもろ新釈』（琉球文教図書、一九五七年）以来のもので、オモロを広く紹介するのに与ったといえる。先生の琉球文学研究は、初期の研究である「組踊の成立と躍奉行について」（『言語生活』第二五一号、一九七二年八月）や「朝薫と朝敏の時代」（『文学』第40巻4号、一九七二年四月）等の芸能や和文学を論じた先駆的な論文も忘れてはならないが、やはり、特徴的な研究はオモロを中心資料にした文化史的、思想的な研究であるといえる。特に、中国文化の影響を古琉球世界の中に探った点が大きいのではないか。具体的には、琉球古来の信仰と考えられてきたヲナリ神の問題に媽祖信仰との関連を探る視点を導入したことや、古琉球期を中心とする碑文等にみられる鳳凰文が中国から導入されたものであり、さらにこれが琉球において王権の意匠として日輪双鳳雲文に発展し、それがオモロをはじめとして、王府がノロに下賜したと考えられる扇や、王府の工芸品等にみられることを考察したことである。先生のこれらの研究は、琉球文学、文化研究の新たな領域を我々に示した。先生は、勝れた琉球文学研究者である。

最後に、先生との想い出を若干記して追悼の文を閉じたいと思う。私にとって先生は、琉大国文科（正式には、琉球大学法文学部文学科国語国文学専攻）の先輩である。琉球大学を卒業して、法政大学の大学院で学び公立高校の教員をしながら、辛うじて研究を続けてこられたのは、比嘉先生が論文執筆の機会をいろいろと与えて下さったからである。特に、『琉球の言語と文化 仲宗根政善先生古稀記念』に修士論文の一部をまとめた『混効験集』についての考察（後に、拙著『おもろさうし』と琉球文学』笠間書院、二〇一〇年三月所収）の掲載の機会を与えて下さったことは、今でも感謝している。私の教員生活は、『琉球の言語と文化』がでたその年から始まったのである。また、研究所の「沖縄資料」の一冊として出された『尚家本 おもろさうし』（一九九三年七月）は、比嘉先生と日曜日の午後、尚家本の影印を読み合わせて作ったものである。この書の刊行は書誌的に重要でありながら、研究史上、尊重されてこなかった尚家本を初めて活字にした意義を持つ。町田市にあった先生の家と私の住まいが近かったために、

それぞれの住まいの地区センターの一室を勉強部屋にして、尚家本の読み合わせを行った。その折に先生が話された沖繩に関する様々な雑談が、私の大事な研究の「肥やし」になっている。そんなこともあり、先生が研究所で続けたオモロ研究会を私が引き継ぎ、なんとか今日まで細々と続けている。

残念なのは、拙著の率直な感想を聞かないままに、先生が逝かれたことだ。立正大学に就職が決まった連絡をした折、すぐに電話を下さって御祝いの言葉をいただいた。拙著を送った時は、少し時間をおいて礼状が届いた。しかし、細かな批評はそれに書かれていなかった。先生にお会いできるのではないかと思ひ、淡い期待をもって那覇の栄町を幾度か歩いてみたが、先生の姿を見付けることができなかった。オモロ研究の先輩としての先生の批評が、聞き取ったのだが。今さらいってもしかたがないが、先生が沖繩文化研究所を去られたことは、なんとも残念である。一時期はとり残されたような気持ちになったが、今は先生が取り組まれた研究課題の一端を少しでも継ぎたい思っている。それが、比嘉先生から受けた学恩に対する唯一のお返しになると思っている。

（沖繩文化研究所報第74号より転載）